

『バルーン・タウンの殺人』

他四編

松尾由美・著　ハヤカワ文庫

中山　まき子

夏の一時、あなたのお昼寝をきつと邪魔してしまふ、軽そうで重く、それでいて心優しいサイエンス・フィクションへのいざないです。

人呼んで「バルーン・タウン」、それは「やっばり、赤ちゃんをお腹で育てたい」という女性たちが一時的に暮らす人口都市。人間的な都市作りをめざす東京都が設けた特別地区です。今や世の中

はAU（人工子宮）が当たり前の時代です、と、奇想天外な着想がまず目を引きまします。その科学を駆使した子作り法的一端とは、「子どもを作ることに決めると、まず男女はピルを止め、病院にいった小さな箱型の機械を借り出します。女性の排卵日を知るためのもので、それをもとに毎月適当な日にセックスをし、翌日病院に出かけてい

くわけです。(中略)ここで一連の検査を受け、受精が起こっていれば、胚が子宮に着床する日にそれを取り出す処置を受けます。その後はすべて病院まかせ。胚はAUに、女性は家に帰るというわけです。

えっ、ナチュラル志向のあなたはもう不愉快になり、「誰がこんな本を読むものか」と思ってしまったかもしれません。逆さ眼鏡をかけた時、世界の見え方は変わります。それは今の暮らしを見つめ直す絶好の機会でもありますから。

殺しです。幸い大人の目撃者が三人もいます。なのに、目撃者たちは、ただ「お腹が大きかった」と驚きの証言をするだけ。そう、妊婦とは、皆同じような服を着て、同じような格好をして、人格というカテゴリーから外された「珍種の動物めいた」生き物。松尾の筆はさらにシニカルで

す。「ねえ、すごい美人の妊婦なんての見た記憶ある？ 本当はいるはずじゃない。少なくとも理屈の上では。けど、いつも気が付かないの。ああ妊婦だな、で済んでしまう。妊婦は透明人間なの。お腹以外は」と。

犯人はバルーン・タウンに暮らす女性であることは明瞭です。だってまともな人々はお腹を膨らますといった醜悪な姿にならず、その日が来たらドレスアップして赤ちゃんを受け取りに行くのだから。そうだから。この犯人捜査のためにバルーン・タウンに派遣されたのはキャリアアウーマン刑事マリナです。妊娠・出産にまったく免疫のない若い男女の感性をマリナに託し、著者は存分に自分の筆先を楽しみ、時折ニッと笑う姿が私の目に浮かんできます。

この筆者、なんと、一児の母と紹介されています。SFとは無縁に見える自身のお産体験を無駄

にしないどころか、「妊婦探偵、よき器の像（あるいは BE A GOOD VESSEL）、' 亀腹同盟、流しの助産婦と黄金の指の股、謎を解く鍵は会陰保護」と、妊婦体験者ならではの着想を漂わせるこのしたたかさ。

かつて、上野瞭は『アリスの穴の中で』（新潮社一九八九）という小説で、『男性は本当に女性の側に立てるのか、性の境界を越えることによって人は何処へ行こうとするのか』をテーマに男の妊娠を描きました。この作品は会社課長で短大生の娘を持つ父が、ある日突然自分の妊娠に気付くという設定で始まります。作品は終始、処女懐胎ならぬ童貞懐胎のようで妙に白々しく、努力と、だが感性の限界とが露呈しており、男性の悲しいまでの思考実験を見るような気がします。あるいは小川洋子は『妊娠カレンダー』（文藝春秋一九九二）で、妹の目を通した妊娠の感性を全面に出

して注目を浴びました。

両者は妊娠する身体を直視し、その艶めかしさやおどろおどろしさを示した点で斬新な試みであったように思います。しかし妊娠する身体感覚や感性を子産みの思想にまで昇華させるには至らなかったと思います。

小説とSFを並べて云々することはできないのでしょうが、でも勝手な比較をさせて戴けるなら、松尾のそれは、暮らしの中でよく有りがちな会話の中に、実にさりげなくリアルな身体感覚と、今日の多様な子産みの思想を織り混ぜている妻さがあるように思います。

そのみごときは、特に第四作品に現れています。この作品は初老の紳士が真夏の路上で「なぜ助産婦に頼まなかったのか？」というダイニングメッセージを残していく場面から話が始まり、事件はやがて国際的陰謀と関わっていることが明か

されていきます。その中で伝統社会の近代化をめぐる問題を、フェミニズムの問題を、出産に関する医療問題を、気負いも銜てらいもなく作品に組み込んでいます。

例えば、アジアの小国サイラムの女性首相がこのバルーン・タウンで出産することになるわけですが、彼女の国では、過去に妊娠や出産のやり方を徹底的に近代化する政策が取られ、病院で、しかも事実上帝王切開でしか子どもを産むことがで

きなくなってしまうのです。というのは…。
おっと、これ以上は止めましょう。

でもあと一言だけ。一連の作品を通し「あらまほしき妊婦」に徹頭徹尾反抗する未婚の妊婦探偵、小暮美央の姿は、あなたの目にどのようなものでしょうか。どうぞ彼女の言行に敏感になりながら、しばしば子産みの思想とお戯れください。

(鳴門教育大学)

『あやちゃんの贈物』

—— 絵に託した生命の輝き ——

三瓶和義・正子 編 萌文社